

## 問題 D

問 1 嚥下機能評価で正しいものを選びなさい。

1. 主訴から摂食・嚥下障害が疑われた場合、病歴聴取と問診では見逃すことが多いので、必ずVF検査やVE検査を実施する必要がある。
2. スクリーニングテストは、全身及び局所所見を観察した後におこなう。
3. 反復唾液飲みテスト(RSST)は、人差し指と中指で輪状軟骨を触知して、30秒間の唾液嚥下回数を測定する。
4. 水飲みテストでは、嚥下前・中・後のむせを評価する。

問 2 検査について誤っているものを選びなさい。

1. 嚥下内視鏡検査では、嚥下の瞬間が見えないことが最大の欠点である。
2. 嚥下内視鏡検査では、咽頭・喉頭内の分泌物貯留の状態や構造・麻痺の有無などを観察できる。
3. 嚥下造影検査で使用する造影剤は、胃透視検査でよく用いられるガストログラフィンを使用する。
4. 誤嚥を認めたら即検査を中止するのではなく、その誤嚥に適切に対応したうえでその誤嚥を防ぐ代償手段の検討を行なう。

問 3 摂食・嚥下機能評価について誤っている組み合わせはどれか選びなさい。

1. 喉頭挙上開始遅延 —— 嚥下造影検査
2. 食物残留 —— 内視鏡検査
3. 湿性嗝声 —— 頸部聴診法
4. 不顕性誤嚥 —— 水飲みテスト
5. 随意嚥下運動 —— 反復唾液嚥下テスト

問 4 嚥下内視鏡検査で評価できないのはどれか選びなさい。

1. 軟口蓋の鼻咽腔閉鎖機能
2. 喉頭の挙上
3. 喉頭蓋谷への食物の貯留
4. 喉頭の知覚
5. 声門閉鎖

## 問題 D

問 5 間接訓練について正しいものを選びなさい。

1. 間接訓練は食物を用いない訓練のため、全身状態が安定していない急性期でのみ実施される。
2. 間接訓練は食物を用いない訓練のため、誤嚥の心配はない。
3. 意識障害やバイタルサインが不安定な時は、間接訓練は行なってはならない。
4. 間接訓練において、対象者の疲労や全身状態に配慮することが常に必要である。

問 6 梨状陥凹の残留に有効な訓練はどれかを選びなさい。

1. 息こらえ嚥下(supraglottic swallow)
2. メンデルゾン法(Mendelsohns maneuver)
3. 頸部伸展
4. プッシングエクササイズ(pushing exercise)
5. ブローイング訓練(blowing)

問 7 口唇閉鎖や呼吸機能の強化を目的とした訓練として適しているものを1つ選びなさい。

1. プッシングエクササイズ
2. 嚥下パターン訓練
3. 巻き鳥(吹き戻し)訓練
4. ファルセットエクササイズ
5. シャキアエクササイズ

問 8 嚥下機能評価に関する記載で正しいものを1つ選びなさい。

1. 水飲みテスト、フードテストで嚥下反射が確認されなかった場合、経口摂取は禁忌とする。
2. 嚥下造影検査で喉頭侵入が確認された場合、胃瘻を検討する。
3. 嚥下造影検査の模擬食品は、出来るだけ通常の食事に味、物性を近づける。
4. 最長呼気持続時間15秒、最長発声持続時間8秒の場合、呼吸機能の低下が考えられる。
5. 精密水飲みテストは30ccの常温水を用いる。

## 問題 D

問 9 誤嚥の有無の検査(スクリーニングテスト)のうち、「感度は非常に高いが、特異度が低い」と言われる検査はどれか。

1. 反復唾液嚥下テスト(RSST)
2. 改訂水飲みテスト(MWST)
3. フードテスト(food test)
4. 咳テスト(CT)